

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.22 (2014年12月号) ◆

一年があっという間に過ぎ、2014年最後のニュースレターをお届けする頃となりました。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。20世紀メディア研究所は、竣工相成りました3号館に移転し、11月より例会も新3号館を会場にしております。なお、かねて告知させていただきました通り、『Intelligence』購読会員の皆様へのサービス向上の一環として、会員向けのブログの開始、占領期用語集の販売などを準備しております。今後ともよろしく願い申し上げます。

【新曜社版『占領期生活世相誌』発刊記念及び20世紀メディア情報データベース一周年記念ワークショップ in 関西】

去る11月15日、12:30から14:30まで、大阪市立大学文化交流センター 小セミナー室にて上記ワークショップを開催しました。

- ①山本武利会長挨拶と趣旨説明 (12:30～12:45)
- ②松永寛明(仏教大学社会学部講師)「プランゲ文庫資料と犯罪社会学・法社会学」(12:45～13:15)
- ③中嶋晋平(関西大学非常勤講師)「プランゲ文庫資料と私の研究：復員」(13:15～13:45)
- ④土屋礼子「20世紀メディア情報データベースの活用方法について」(13:45～14:15)
- ⑤質疑応答・ディスカッション (14:15～14:30)

参加者の皆さんには、限定記念品として占領期用語集を配布いたしました。

【第87回20世紀メディア研究会】(早稲田大学3号館809教室 11月29日(土)午後2時半～5時)

- ・滝口 明祥(大東文化大学専任講師)「共産党系メディアにおける〈太宰治〉表象」：共

産党系メディアおよび批評家による「太宰治」評価の変容を分析した。「太宰治」受容史という新たな領域を開く報告であった。

・時野谷 ゆり（早稲田大学文学学術院非常勤講師）「メディアを越える「戦争」と「女」——坂口安吾「戦争と一人の女」の映画化をめぐる」：CCDによる検閲処分と改稿で知られる問題作、坂口安吾「戦争と一人の女」とその映画化をめぐる考察。映画版「戦争と一人の女」（2013年公開）の脚本家荒井晴彦氏への聞き書きの紹介なども交えて報告された。

・川崎 賢子（日本映画大学）「占領期における文学の近代化と古典化をめぐる——第二芸術論への一視角」：桑原武夫「第二芸術—現代俳句について」（『世界』1946年11月）の検閲資料・短詩型の近代化と古典化をめぐる言説の布置、20世紀メディア情報データベースを用いたキーワード出現頻度の分析などを報告した。基盤研究(C)「GHQ占領期における近代化及び古典再編に関する諸言説分析を総合する文芸史的研究」の成果報告の一環である。

※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされます。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、12月13日（土）午後2時30分から午後5時30分まで早稲田大学早稲田キャンパス3号館8階の809号室にて、田村紀雄（東京経済大学名誉教授）『日本人移民はこうしてカナダ人になった』を書き下ろして、ドン・マントン（Don Munton）（関西学院大学客員教授・Visiting Professor of Canadian Studies, Kwansei Gakuin University）「世界の国立公文書館で探り出すカナダの秘密のインテリジェンス史 "Discovering Canada's Secret Intelligence Past in World Archives"」をうかがいます。

NPO法人インテリジェンス研究所主催の第9回諜報研究会は12月20日（土）13時～16時明治大学生田キャンパス中央校舎4階405教室、および明治大学平和教育登戸研究所資料館にて行われます。（【会場へのアクセス】小田急線生田駅南口徒歩15分、小田急線向ヶ丘遊園駅北口から小田急バス「明大正門前」行き終点）
http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/ikuta/access.html 参照、山田朗（明治大学文学部教授、明治大学平和教育登戸研究所資料館館長）「陸軍の秘密戦における登戸研究所の役割」、山本武利（NPO法人インテリジェンス研究所理事長）「1937年のインテリジェンス事情—2つの極秘機関誕生のなぞ」の報告があります。

2015年1月31日、2月28日（例年2月はお休みをいただいておりますが、今年度は例会を開催することにいたしました）、3月28日、4月25日と、20世紀メディア研究会を予定しております。どうぞご予定にお入れ下さい。ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム】[敬称略]

没後30年ということで、テキストの文庫化がすすんだ有吉佐和子（1931-1984）、原爆後遺症を描いた「祈祷」などの初期作品、1970年代に早くも高齢社会を予見した「恍惚の人」、環境問題を取り上げた「複合汚染」など、生前は通俗的なストーリーテラーとして文学的に必ずしも評価が高いとは言えなかったが、今なお新鮮な作家である。有吉は、坂西志保の仲立ちでロックフェラー財団の助成を得てアメリカに渡った文学者の一人で、財団の援助を受けた文学者には他に、福田恆存、中村光夫、江藤淳、安岡章太郎、小島信夫、庄野潤三、大岡昇平、石井桃子らがいる。ロックフェラー財団のポスト冷戦期における日本文化人への働きかけには非常に興味深いものがある。今年刊行された石井桃子の評伝『ひみつの王国 評伝石井桃子』（尾崎真理子著、新潮社）にも、わずかながら言及はあった。有吉の場合は帰国後「ふえるとりこ日記」を著すなどポストコロニアル的な関心を示している。今後の資料の掘り起こしや、総合的な研究が待たれる領域だろう。

[12月10日付 文責：川崎賢子]